



Wilkinson Sword：住み替え

人類はよく忘れるが、史上初めてつくられた会社は、家族である。

事業を営むのに欠かせない要素は、ほんのわずかだ。金、これは女の手にあるほうが安全なことが多い。父親の良識。そして子どもたち、つまり念入りに計画された愛の産物か、あるいは単に情熱と衝動と人間的な過ちの結果である。

創業から、その後これを所有してきた持ち主たちの長いリストまで、Wilkinson Swordを眺めていると、そこには段階を追って進むひとつの型がある、と思わずにいられない。

うまくいかなかったものが、本当に改善されたことは一度もない。

ただ、金の山で覆い隠されただけだ。

そして金というものは、ご存じのとおり、たわごとを覆い隠すのがじつにうまい。

1891年–1973年

The Wilkinson Sword Company。

これが本物の会社だった。

82年にわたる、本物の生命、歴史、革新、物語、そしてあのいかにも英国的な慎み。それがあるからこそ、今日もなお多くの企業の手本なのだ。

1973年–1978年

1978年–1989年

1989年–1992年

1992年–2000年

2000年–2003年

2003年–2015年

2015年–現在 — Edgewell Personal Care

残ったのは、幾度も家を替え、幾つもの部屋で眠ってきた、貴族の叔母だ。

買われ、売られ、相続され、再編され、移転させられてきた。

それでいて、自分自身のものはほとんど何も生み出していない。

いまも、昔から立っていたその場所に立っている。年間およそ30億ドルの売上と、おおかたは前の世代が築いた評判とともに。

そこで彼らは、1980年代の古いマーケティングの手に戻った。

同じ製品。

同じ刃。

同じ会社。

市場によって違う名前。

ヨーロッパではWilkinson。

北米、アジア、ロシアではSchick。

Wilkinson叔母さんは、家伝の銀器を手放さなかった。

ただ、別の家へ引っ越したただけだ。

今日までに、住所は何度も変わった。

レディは変わっていない。

ようこそ
フェルディナンド